

## 10 (1994年4月～1996年3月)

### 人間関係原論 授業記録

〈第三グループの2〉

星野欣生 (南山短期大学教授)

#### ◆ 授業の枠組について

・人間関係科の必修科目である。

(人間関係科では科目の殆どが選択科目になっており、科の教育目標にてらして、全員必修になっているのは、この人間関係原論とフィールドワーク、同研究法、人間関係トレーニングである)

・2年間通して実施される。入学時から卒業時まで、基本的に学生もスタッフも同じメンバーである。1年次は、毎週木曜日2限目に、2年次は金曜日1、2限で不定期となる(開講時に指定された)。

・22期生については、学生108名(内1名は留年生)、スタッフ4名(いずれも、人間関係科専任教員で、星野、木村、市瀬、中村である)。

#### ◆ 授業の形態上の特色について

・全体を通して、「体験学習の方式」を核として進められた。あらかじめ決められたプログラムはなく、1回毎に設定されたその日の授業のねらいを達成するために有効と思われるプログラム(実習、ふりかえり、小講義など)を提供し、学生は体験的に学習することになる。いつも、《体験》～《指摘》－《分析》－《仮説化》の「体験学習の循環過程」をふむように計画される。したがって、講義中心ではなく、小講義は学生が自己の体験を仮説化するのを援助するためになされることが多い。

・2年間を通して、あらかじめ決められたプログラムはなく、1回毎、その日の授業が終わった後、一定の日にスタッフが集まって、討議して次回のプログラムを決定していった。それは、授業全体のねらいを基に、その折々の学生やスタッフのニーズにそったものを、その都度組み立てていくことが、必要であると考えられたからである。体験学習の性格からしても同じことが言える。

・スタッフは一つのチームを構成し、「チームティーチング」を行なう。つまり、次の授業を計画するためには、まずその日の授業のふりかえりをし、その時の学生の状況などを十分把握した上で、次回のプログラムをたて、実施した。チームの4人は、授業の間、それぞれの役割（それは、次回の授業を計画する際合意の上決定される）を、相互に助け合い協力しながら遂行していく。なお、このミーティングでの決定は、いつもコンセンサス（合意）でなされた。

#### ◆ 人間関係原論Ⅰ、Ⅱのねらい

1994年度の学生便覧の授業科目案内には、次のように記されている。

「2年間継続される必修科目。人間関係教育の背景をなす人間論および人間関係の原理や教育哲学に関する理解を深める。同時に人間関係科での様々な学習体験を統合し、自らの生き方のフィロソフィを結晶化し明確化することに取り組む。」

それに基づいて、4人の担当スタッフは、新学期が始まる前からミーティングを重ね、具体的な授業のねらい（目標）を設定した。ねらいの設定に先立ってスタッフは、それぞれにこの授業でやってみたいこと、期待することなど、スタッフとしてのニーズや目標を出しあった。その一部を紹介してみる（順不同）。

人間関係の原点を見なおす。学生が大人になるように。学生がそれぞれに自分の生き方をもてるようになる。生き方（学び方）を学ぶ。それぞれの成長変化を跡付ける。人間関係科をわかる。人間関係に関する諸科学にふれる。人間関係研究の歴史を学ぶ。人間関係に関する諸理論を学ぶ。自分を知る。関係づくりをする。社会、環境への関心を持つ。問題意識を持って生きる。Change Agent（変革推進体）になる————— など。

さらに、学生の状況を考え、これまでの人間関係原論のプログラムなども参考にして、次のように「この授業の2年間のねらい」を設定した。

\* 人間関係原論ねらい \*

- \* 学ぶことは .....
- \* 生きることは .....
- \* 愛は .....
- \* 世界は .....
- \* 私は .....
- \* .....
- \* .....

☆ このようなことにとりくみ、自分なりに応えてみる（実践と探求をくり返す）。

☆ その中での自分の歩みを確かめ、それを生かして生きる。

◆ 人間関係原論の授業の実際について

次にこの授業の実際を時間の経過にしたがって記述する。

大きくは4つに分けることが出来る。

- I 1年生前期 学ぶ（生きる）とは何なのかを、学生のニーズを中心に、  
リサーチの形で取り組む
- II 1年生後期 さまざまな学び（生き方）があることを探る
- III 2年生前期 「CREW」を大テーマとし、“つなげる”に焦点をあてる
- IV 2年生後期 同 上 “かかわる” “出会う”に焦点をあてる

# 人間関係原論 I 前期 1994.4～1994.7

## 1 1994.4.28

今回のねらい

「原論のイメージをもつ」

スタッフの紹介  
ねらいの提示  
すすめ方など、いろいろ  
My Story、キーワード  
について

MY Story記述

### ・「スタッフの紹介」

この日は初回であり、担当するスタッフの紹介から始まった。それぞれが自己紹介したが、自分の特徴などを、一工夫して伝えた。

### ・「ねらいの提示」

次いで、全体のねらいをスタッフから提示し、説明を加えた（このねらいはプリントにして配布された）。ねらいは抽象的であり、これから何をしていくのか分からない、難しいというような反応が学生の中から見られた

### ・「すすめ方など、いろいろ」

引き続き、すすめ方、出欠のとり方やレポートのこと、また、毎回、学生は授業終了後、「MY Story」（B5用紙1枚）を書き提出することなど、この授業での約束事について説明する。このことは、いわば、学習をはじめにあたって、スタッフと学生の間での授業についての契約を交わすことである。授業の入り口での重要な事柄である。

### ・「MY Storyについて」

2年間を通して、この時間の中での「私」を主人公にして、毎回物語を書いていく。絵を描いてもよい。最終的には2年間の私の物語が出来ることになる。その中で自分の変化成長を追うことが出来るし、年表をつくることも出来るだろう。また、毎回キーワードを書き留めることも要請している。その言葉によって、その日の自分が思い出せるようにするためである。

### ・スタッフのふりかえりから

（1回の授業が終わった後、スタッフは必ずミーティングを持つ。そこでは、まず、その日のふりかえりをし、次いで、次回のプログラムをつくる。このレポートでは、その折りのふりかえりから話されたことを抜き書きする）  
学生からは眠い、疲れていたという反応が多かった。これから何をしていくか分からないので、難しいという意見、反対にねらいの話はよく分かったという意見もあった。キーワードは何となく書いている。……………

## 2 1994.5.12

### 今回のねらい

「自分たちの関心事を明らかにし、共有化する。ブレン・ストーミング法を体験する」

### 導入

これからしていくことの説明

ブレン・ストーミング「私の関心事」

MY Story記述

### ・「これからしていくことの説明」

この授業の展開として、スタッフは、出来るだけ学生の関心にそってすすめていこうと考えた。スタッフ主導でなく、学生中心にという考えからである。具体的には、学生から今関心を持っている事柄を出してもらい、共通した関心事毎にグループをつくり、リサーチをすすめることとした。そして、そのグループ活動を通して、グループの中での自分のありよう、つまり、プロセスを考察していこうとした訳である。同時に研究調査法の学習をすることになる。学生に対しては、これからすることの説明をし、なぜ、それぞれの関心事を探るのか、なぜ、リサーチをするのか、また、そのことにどういう意味があるのかなど詳しく話す。

### ・ブレン・ストーミング「私の関心事」

次いで、配布した日程表の裏につけておいた数字によって、同じ数字の人でグループを編成した。そして、「私の関心事」というテーマで、ブレン・ストーミングを実施。勿論、プリントを配布して、ブレンストーミングについて説明をした上であるが。

### ・スタッフのふりかえりから

全体に楽しんでやっていた。ブレンストーミングという方法が話しやすい雰囲気をつくっていた。グループの発表も面白かった。「関心を持つ」というのはどういうことなのか、研究調査はそこから始まること、物事に関心を向けることの必要性を感じとったのでないか。今まで全く知らなかった人と知合えてよかった、という反応が多くあった。

## 3 1994.5.19

### 今回のねらい

「自分たちの関心事をフォーカスする(1)データの整理の仕方を学ぶ」

### 導入

フォーカス:「私の関心事」やり方の説明(簡易KJ法について)

### 実施

今回のプロセスのふりかえり

MY Story記述

### ・フォーカス:「私の関心事」

前回ブレンストーミングで出した事柄を、グループによる簡易KJ法によって整理した。

ここでやろうとしていることの意図について、学生には次のように説明した。「関心のあることをさらに深める。グループの作業を通して、メンバーとのかかわりから学ぶことが出来る。同時にリサーチの技法も会得出来るはずである。」つまり、関心事はコンテンツとして、リサーチのテーマとなり、グループの活動は、そのプロセスから、自他の関係やグループのプロセスを学ぶことになる。同時に、技法としてブレンストーミング、KJ法やリサーチの方法を体験することとなる。この3つを同時的にすすめるようとしている訳である。

・スタッフのふりかえりから

学生は意外にスムーズに取り組んでいた。概ね楽しんでた。簡易K J法もそれなりに出来ていた。これからの展望が出来ているかについては？。

#### 4 1994.5.26

今回のねらい

「自分たちの関心事をフォーカスする②  
私の関心を意識化してみる」

導入

前回の作業のつづき  
ふりかえり用紙記入  
発表（展示）  
私の関心シート記入  
グループでわかちあい

MY Story記述

・「前回の作業のつづき」

前回の作業をグループで継続する。予定した時間通りに「それぞれの関心事」の整理が出来た。その段階で、このグループの中で、自分に対して、グループに対して気付いたことを、ふりかえり用紙に記入した。プロセスから自他やグループのありようについて学ぼうとするものである。

・発表（展示）

グループでつくった作品を教室にはりだして全員が見てまわった。自分が出した関心事に加えて、他のメンバーの関心事を目にすることで、一人一人の関心事を広げようとするものである。

・「私の関心シート記入」

「私の関心アイランド」という用紙をつくり、島の表札名と問題意識を5つ書き出し、それに一番関心の高いものから順に順位づけをした。記入後グループでわかちあいをする。

・スタッフのふりかえりから

貼りだされた他のグループの作品に関心をもって見ていた。わかちあいのグループの人数は多すぎた。わかちあいの方法について、もっと具体的に伝えた方がよかった。簡易K J法の作品はよく出来ていた。「私の関心アイランド」の問題意識はどれ位書けていたか？

#### 5 1994.6.2

今回のねらい

「リサーチに向けて①  
—意識化からテーマづくりへ—」

小講義「リサーチとは？」  
リサーチのテーマづくり  
（個人）

グループング

リサーチのテーマ、問題意識づくり（グループ）

MY Story記述

・小講義「リサーチとは？」

ここでは、原論のねらいに引き戻して、リサーチの意味を伝えた。ここで言うリサーチは中学校や高校での社会科の研究とは違うこと、大学とは何か、研究するとは何かに言及した。内容に簡単にふれると、「何を（対象）、なぜ（理由）、どんな風に（方法）、ゆえにどうなのか（結果）」を、具体的に「お金」という問題をとりあげて説明した。

・「リサーチのテーマづくり」（個人）

まず、個人でリサーチしたいテーマを考え、それをプラカードにして首から

かけ、教室の中を歩き回る。他の人のプラカードをみて質問したりしながら、グルーピングをしていった。1グループ5～6人を目標としたが、結果的には3～8人19グループとなった。引き続き新しく出来たグループで話し合い、改めてテーマを決定し問題意識を洗い出した。

・決定したテーマの例

<BESTなつきあい方とは?><恋愛-愛される条件><宗教(現代人と宗教)><化粧とその害><ザ就職>など

・スタッフのふりかえりから

感想が個人によってバラバラである。プラカードをつけて歩くのは恥ずかしかった。各グループが発表し、再構成したのはよかった。具体的に何をするのかについては、問題解決型、探求型、行動型などのバラツキがあった。小講義中少しザワザワしていた。

6 1994.6.10

今回のねらい

「リサーチへ向けて②  
-テーマづくりとリサーチの計画-

導入

小講義「リサーチの方法をめぐって」

\*調査、面接

\*読書、ディスカッション

今後の日程とルールについて

小講義「テーマ化すること  
ということ」

-日常生活の意味化-  
グループでの話し合い  
計画表の記入、提出

MY Story記述

・小講義「リサーチの方法をめぐって」

\*調査、面接

\*読書、ディスカッションについて、2人のスタッフが講義した。

・今後の日程とルールについて

別紙を渡して説明。7月7日と14日を発表日とすること。活動のスケジュールはグループに任せるが、授業日6月23日と30日は学校に集まって作業するこ、毎回MyStoryを書くことなど。

それに従って、各グループで話し合い、今後の活動計画表を作成する。

・小講義「テーマ化すること」——日常生活の意味化——について

その中では自分の関心事をテーマ化することで、日常生活の場で生起している事柄に意味をもたせることが出来、さらに問題を深めていくことが出来ることなどに触れる。

・スタッフのふりかえりから

小講義の時、少しザワザワ、ノートをとっている人もいたが、喋っている人も。グループに分かれてからは、しっかり話していた。問題意識が明確にならないグループもあるが、グループでのリサーチの最初の体験と位置づける。

7 1994.6.23

グループでの活動日（教室にて）

8 1994.6.30

同 上

9 1994.7.7

リサーチの結果発表日（1）

10 1994.7.14

同 上（2）

- ・発表のため、各グループはレジュメをつくった。作り方はスタッフが指示。
- ・発表は2日に分けて行なった。発表の順番は、その都度くじをひいてきめた。一つのグループが発表したあと、質疑応答の時間を持ったが、その際、直前に発表したグループから一言コメントすることとした。
- ・リサーチの期間も発表の時間も短かったが、自分たちの関心に基づいて、活動したので、全体に満足感が高かったようである。また、スタッフ側からみて、リサーチ内容、活動内容とも、かなりしっかり出来ていたようである。何もないうところから、自分たちで作り上げたことに大きい意味があったと思われる。ただ、発表の仕方にはもっとトレーニングが必要だし、きく側との間にもっとやりとりがあればよかった。
- ・発表が全部終わった後、前期のレポート課題（「3ヵ月半人間関係科で生きてみて」-副題をつける-）を提示する。あわせて、「グループの中の私」（記入用紙作成）について自己評価したものも、レポートと一緒に提出させることとした。

◆ スタッフの前期のふりかえりから

多くの人が自分のやったことに満足していた。他の人たちのリサーチにも感心してきていた。リサーチにいくまでの過程は、時間不足で忙しかった。時間不足で発表に対してスタッフからコメントが出来なかった。学生はやったことに満足しているが、その意味をどれ位理解出来ているか？もある。グループ活動のプロセスについては、自己評価で考察出来ただろう。自分たちの関心を大切にすること、それが尊重されること、自主的、主体的に行動することが学びにつながることで、それが人間関係科での学び方であることが少しは理解出来たのではないかと。



## 人間関係原論Ⅰ 後期 1994.9～1995.3

### ◆後期に向けてのスタッフの話し合いから

・前期はそれぞれの関心を拾いあげ、リサーチすることで「関心」を意味化することを試みた。意味化することが、日常の関心事を学びにつないでいくことである、関心を持つことが学びのはじまりであると考えたからである。それは、そのまま、その人の生き方につながっていくことでもある。そのことが、学生にどれ位理解されたかは疑問であるが。

・学生にそのことへの理解を一層深めてもらうことが、後期の学習のポイントになる。そのために、「学ぶ」とは何なのかに焦点をあてるとよいのではないか。

・学ぶとは何なのか。なぜ学ぶのか。学ぶことは変わる事。なぜ変わらなければならないのか。変わることは何かを捨てることか。学び方を学ぶこと。学び方の過程、その心的プロセスを考える。学ぶことは、広がる、深まる、つながること。学ぶことは集うこと、楽しむことである。

・以上のようなことを中心に話し合い、前期の学生の学びの状況なども考慮した上で、後期のテーマを「学ぶこと」とした。

・全体の流れとしては、これまでの学び方(学びの体験)をたどり、学びのいろいろな形を明確化する。人間関係科での学び方を明らかにする。学び方の基本的な構造を考え、学びの本質に迫ることを、プログラムを通して実現したいと考えた。

・学習内容としては、上記のようなことを追求しながら、その中で一人一人が変化成長していくことを目指し、その足跡を明らかにすることである。

### 11 1994.10.6

#### 今回のねらい

「後期のテーマ(学ぶこと)にむかっのスタートをきる」

導入  
旗づくり「私の学びのイメージ」  
後期のテーマをめぐって

My Story記述

・後期の授業が始まって、すでに1週間経過していたのでアイスブレイキング的なことはしないで、いきなり本題にはいった。

・「私の学びのイメージ」の旗づくり

①今の気持 ②高校までの教育のイメージ ③人間関係科での教育のイメージ ④後期人間関係科での私のねらいについて順次スタッフの指示にしたがつて、画用紙にクレパスを使って表現していった。まず①②③について、近くの人たちとわかちあい、ついで④を書きわかちあいをした。

・「後期のテーマをめぐって」では、後期原論に関してスタッフのミーティン

グで出ていた事柄を、そのままプリントにして配布し、スタッフが、いま考えていることを伝えた。

・スタッフのふりかえりから

全体的に興味を持ってやっていた。かなりリラックスして作業に取り組んでいた。おしゃべりが多い。My Storyの記述をみると、全体的にpositiveである。旗の内容については、書き易くてよかったようである。

## 12 1994.10.13

今回のねらい

「自分の学びの体験を洗い出す①」  
-地図づくり-

導入

後期のテーマをめぐって  
実習「私の学びのマップづくり」

MY Story記述

・「後期のテーマをめぐって」は前回時間不足で残した分を補ったものである。

・「私の学びのマップづくり」

○、△、□などをアトランダムに書いたB4の用紙を渡し、その丸や四角に、出生前後から現在にいたるまでを思い起して、自分の学びに影響を与えたと思う人、書物、事件、その他何でもよい、などを思いつくままに書き込んでいく。そして、「自分」をどこかに書き入れ、それらと自分をさまざまな線でつないでいく。線を引いたあと、その線の横に、何を学んだかを書き込んでみる。クレパスを使って自由に、創造的に表現するようすすめた。

・スタッフのふりかえりから

学生はたくさん色をつかって創造的に表現していた。作業に集中していたようである。

## 13 1994.10.20

今回のねらい

「自分の学びの体験を洗い出す②」  
-マップづくりとわかちあい-

導入

小講義「私の学びの体験から」  
「私のマップづくり」+α  
同上 わかちあい  
「私のマップづくり」+α②

MY Story記述

・小講義「私の学びの体験から」

2人のスタッフが自分の学びの体験を語る。主旨は学びにはいろいろなタイプがあること、学生のマップでは、学校の先生がたくさん登場していたが、私たちは先生以外からも、さまざまな学びをしていることを話した。学び方について、ある方向づけがされないようにと考えた

・「私の学びのマップづくり」+α

スタッフの話しをきき、また、前回のあと、気づいたことがあれば、マップに付け加えた。

・「私のマップ」わかちあい

くじをひいて、4人グループをつくり、それぞれがつくった自分の学びのマップを発表しあう。言いたくないことがあれば、言わなくてもよい旨告げておい

た。

・スタッフのふりかえりから

スタッフの話の時は、最初ざわついていたが、概ね集中してきいていた。マップにプラスαしている学生も結構いた。わかちあいの時は、全体としてよく話していた。くじびきでグループ編成したことについては、偶然性があってよかったという学生からの反応があった。

#### 14 1994.10.27

今回のねらい

「学びのストーリーづくり」  
(1)

学びのストーリーづくり  
導入  
作業の説明  
作業

これからの予定  
MY Story記述

・「学びのストーリーづくり」

導入のところで、なぜ、ストーリーをつくるのかの説明をした。要点は自分がどのような人や事柄などから、何を学びそれをどのように生かしてきたのかを、データを拾いあげながら辿ることで、自己の形成過程を、学びの視点から明らかにしてみる。そして、そのことから、今の自分のあり方を見つめ直し、“学ぶこと”とは何かを考えてみる事が出来るだろう。

具体的な展開としては、スタッフ側で用意した用紙に、年代順に自分に影響を与えたと思われる「人・もの・事件」を書き出し、それはどのようなことだったのか、具体的にその時の状況を記述し、さらに、そのことからその時あるいは後で学んだことを書く。

・今後の日程を伝える。11月24日には完成していること。それまでは個人作業になるが、授業時は出席すること。個人作業では、親や親族に聞いてみたり、学校時のデータ（連絡簿など）を探したり、友人などに会ったりすることをすすめる。

#### 15 1994.11.17

今回のねらい

「学びのストーリーづくり」  
(2)

導入  
作業

次回に向けて  
MY Story記述

・この日は今後の予定を確認した上で、作業を続ける。

「次回に向けて」では、次回には、出来上がったストーリーをつかって、学びのスタイルの分類をするので、必ず完成しておくように、再度伝える。

学生はスタッフに質問したりしながら、精力的に作業を続けていた。

今回のねらい

「自分の学びのスタイル  
を分類する」

導入  
学びのスタイルの分類  
説明  
作業

次回に向けて  
MY Story記述

・「導入」では、今している作業の意味を次のようなプリントをつかって、詳しく説明する。

1 記述する

自分の基準で、思い出すことを、ありのままに記述する。

ある意味では、すでにこれはひとつの「整理」・・・ここですでに、気づきや学びや発見がある。

2 分類する

より「普遍的な基準」で（つまり、枠、学問的用語、形式）を使って。

\* 1、2の作業のプロセスですすでに自分の学びが深まっていく。自分の成長がある。

3 1、2の作業の結果から。

a 学びのパターンの「多様性」を知り、その中で「人関の学び方」の特徴を知る。

b 自分の学びを整理し、自覚的に、自分の学びを創造していく。

c . . .

d . . .

再出発！

・「学びのスタイルの分類」について

学びの領域として

I知識 II思考 III技能 IV態度 をあげ、

学びの形式として

1. ①強化（条件づけ） ②記憶 ③洞察

2. ④自分の体験（直接） ⑤他者の体験（観察）

3. ⑥能動的 ⑦受動的

のようにわけて、

自分のヒストリーの学んだ事柄の一つ一つについてコードをつけていく。

例えば I-①④⑦

IV-③④ という具合に

・以上の説明のあと、個人作業になる。誰かと相談してもいいし、教室の外の適当な場所で作業してもよいこととした。自由に作業が出来るように考えたからである。11時50分には教室にもどるように指示。

・スタッフのふりかえりから

手順の説明は詳しく丁寧で分かりやすかったのではないか。参考文献を用意して配布してもよかった。相変わらず私語している人がおり、話しかけられて心の中で葛藤しているような場面を見ると、いつか“N〇と言えるあなた”をテーマにしてもいいのではないか。質問にきたのは20人ぐらい、どれ位理解して作業していたか？

17 1994.12.1

今回のねらい

「自分たちの学びのスタイルの特徴をさぐる」

導入

学びのスタイルの分類

—集計作業—

説明

作業

スタイルの特徴の話合い

—分かったこと、考えたことをまとめる—

MY Story記述

・学びのスタイルの分類

くじで決めたグループ（1グループ6人）で、年代毎に（乳幼児期、小学校期、中学校期、高校期、短大期、その他）に、それぞれがつけたコードを発表し、別紙集計表に記入し、集計する。

・スタイルの特徴の話合い

グループで集計したものについて、年代毎に、多かったコードの特徴、一つ一つのコードの意味、一人一人の特徴などについて話し合う。

スタッフから次のように指示する。

(1)コードの特徴と変化

どのような学び方が年代毎に特徴としてみられるか、それは年代毎にどのように変わっていくのか、なぜそうなのか、それは何を意味するのか（学びのスタイルの変化）

(2)コードを深く読む

コードのパターンに特徴があるか、それはどのような意味を持っているのか

・話し合ったことをグループ毎にレポートして提出。

・グループの集計表を提出してもらい、全体の集計をするためのボランティアを募った。10人ぐらいが集まり、後日全体集計をした。

・スタッフのふりかえりから

全体として作業に集中していた。集計の手順はよく理解されていたようである。やっていることの意味がだんだん分かってきたからか。

## 18 1994.12.8

### 今回のねらい

「自分たちの学びのスタイルを意味づける」(1)

### 導入

学びのスタイルの分析・意味づけ  
小講義「研究法について」  
(表を讀むことについて)  
これからのすすめ方

テーマの決定  
研究活動

MY Story 記述

### ・学びのスタイルの分析・意味づけ

全体の集計表、グループのレポートを印刷して全員に配布する。それらをもとにグループで話し合い、研究テーマを決める。集計表に出ている数値をとりあげ、その意味するところを探求しようとするものである。学生には、その例示として、特定の期をピックアップしてその期の学びの傾向と意味を探る、特定のコードの各期の変化とその意味を探る、特定のコードの特定の期における意味などをあげる。

### ・日程としては、今回と次回を研究活動にあて、さの次の回に報告会を開く

### ・研究テーマとしてでてきたものを、以下に幾つかあげてみる。

自分の体験・他者の体験。三つ子の魂百まで。小・中学校期の比較。受動vs能動。能動的学びの変化。時期的学びのスタイルなど。

## 19 1994.12.15

### 今回のねらい

「自分たちの学びのスタイルを意味づける」(2)

導入(日程の確認)  
研究活動

レジュメ原稿提出  
MY Story 記述

### ・各グループは自主的に研究活動を続ける。

## 20 1994.12.22

### 今回のねらい

「自分たちの学びのスタイルを意味づける」(3)

導入  
研究報告会

MY Story 記述

### ・二つの教室に9グループずつ分かれて実施。

各グループの発表時間は8分とする。

### ・終了後、スタッフから簡単にコメントする。

後期でやってきたことは、Ⅰデータを集めること Ⅱデータを分析し、思考すること Ⅲその結果(コンテンツとプロセス)を伝えることであったことなど。

## 21 1995.1.12

今回のねらい
「学びのスタイルを意味づける」(4)
—スタッフよりのコメント—
導入
小講義
「心理学における学び」 中村
「心の発達課題と学びの型」 木村
「全体へ向かう学びを」 市瀬
「学ぶ、かかわる、成長する」 星野
次回に向けて
MY Story 記述

- 各スタッフはレジュメをつくって講義した。

## 22 1995.1.19

今回のねらい
「人間での自分の位置を確かめる」
—My Storyから My Historyへ—
導入
MY Storyの整理と年表づくり
レポート課題提示
MY Story 記述

- My story の整理と年表づくり

この1年間の総ふりかえりの時間とした。課題としては毎回書いてきたMY Storyを1回目から読みかえしながら、それぞれがどのように過ごしてきたのか、その変化を年表としてあらわしてみた。各自の1年間の歴史を作ってみた。

- レポートの課題

- ① 人間で1年間生きてみて、自分が変わったと思う点、変らなかったと思う点とその理由をレポートする。
- ② 自分の「学びのヒストリー」をつくり、22期生全体の傾向と比べて自分の学び方について考えたことをレポートする。

## 人間関係原論Ⅱ 前期 1995.4～1995.7

### ◆人間関係原論Ⅱに向けてのスタッフの話し合いから

・原論Ⅰ（1年次）では、人として生きることは学ぶことであることを、追求してきた。学ぶことの始まりは、物事に興味を持つことであるとし、今それぞれが興味を持っていることは何であるかを取り上げ、テーマ設定をして、グループで深めていった。さらに、後期には、「学び」ということに焦点をあて、それぞれの学びのヒストリーづくりから、さまざまな学びのスタイルを追いかけ、「学び」の意味づけをした。スタッフの基本的な姿勢は、学生のニーズにそった授業展開をすることであった。スタッフとしては、設定する枠組はできるだけ大きくし、学生のニーズに照らして、柔軟に対処出来るようにした。学生自身のニーズをベースにしたので、学生はかなり自由に動いていたようである。それぞれなりの学びがあったことは、レポートからも伺い知ることが出来る。

・1995. 2. 21に実施したスタッフ・ミーティングでは、次のような意見が出された。

人間関係科での学び方を社会に向けて、少しづつ広げていけるようにする。それは、人とどうかかわっていくのか、その人の生き方にそのままつながっていくものである。人間関係科での学び方を概念化することが肝要である。原論のねらいにストレートに入ってみたら、2年次はグループでの調査活動は避けたい。ねらいの外にテーマを一つ設けて、そのテーマをさまざまな角度からみってみる。人間そのものに迫ってみたい。「人間関係論」とは？。今何をやっているのか、その時々意識できるようなプログラム設定をしたいなど。

・1995. 3. 7のスタッフ・ミーティングから

“関係” “かかわり” ということが、言語化出来るようにしたい。言い換えれば、人間関係科で2年間何をやってきたかを、卒業時にこたえることができるようになってほしい。スタートとしては、1年次とのつながりも意識して、人間関係科での学びに焦点をあてる。テーマのキーワードとして出されたものは、つながり、人間そのもの、かかわること、生きる、愛など。

・1995. 4. 3のスタッフ・ミーティングで次のようなことを決めた。

「つながる、関わる、出会う、ともにある」を全体のテーマとすることに決定。「C. R. E. W」(クルー)とよぶ。C-connection、R-relation、E-encounter、W-witnessである。そして、「CREWニソカン22」を合い言葉にする。

・今年度の授業は、金曜日2コマとなるが、基本的には月2回程度のペースとする。



## 1 1995.4.28

### 今回のねらい

「南短での私の学びをつないでみる」

導入

実習「南短での私の学び」

説明

ラベル記入

作成

わかちあい

私の目標づくり

今年のねらいをめぐって

MY Story記述

### ・「南短での私の学び」

“つながり”というテーマの入り口で、まず人間関係科での自分の学びのつながりを、受講科目を一つの地図として、表してみようとした。このことは、1年次の自分をふりかえるとともに、2年次の目標作成につながるものでもある。方法としては、KJラベルに1、2年次の受講科目を記入し、領域的に近いもので島づくりをした。完成した地図をみることで、自分が人間関係科で何を学ぼうとしているのか、それらはどのようにつながりあっているのかを考えることが出来る。A3の用紙をつかったが、思い思いの表現をしていた。完成後2～3人でわかちあった。

### ・「私の目標づくり」

私の人関での学びの地図を参考にして、人関での今年1年間の目標をたてた。別紙に記入。

### ・「今年のねらいをめぐって」

スタッフから原論Ⅱのねらいと前期の日程について説明する。関係の諸相として、「つながり、関わり、出会い」をとりあげ、それらの基底にある一つの考えあるいは価値として、「ともにあること」について説明。

### ・スタッフのふりかえりから

学生は興味を持って作業をしていた。教室はNo21でなくNo2であったが、作業の性質からかえて良かった。目標づくりも真面目にやっていた。ねらいについての説明はよく聞いていた。

## 2 1995.5.12

### 今回のねらい

「\*さまざまなことからの中に“つながり”を発見する

\*自分の視点(ものの方・考え方)に気づく

\*“つなぐ”主体としての自分を意識する」

導入 これからの3回の流れの説明

実習「私がつなぐ社会」

-新聞記事の中に“つながり”を探す-  
個人作業

MY Story記述

### ・これからの3回の流れの説明

ここでは、まず、「つなげる」ことに焦点をあてた。「私が“つなぐ、考える”」ことを通して、「つなぐ」主体としての自分を意識しようとしたものである。そのことを通して、自分のものの見方、価値観に意識を向け、問題意識をもつてものを見ることが出来るようになることを考えた。そのことは、人と人との関係の中でも大切なことであり、他とのつながりの中で自分が他に与える影響にも気づいて欲しいというねがいがあった。

### ・実習「私がつなぐ社会」

中日新聞の前日の朝刊をつかった実習である。まず一人一人新聞をひろげ読んでみる。そして、関係のありそうなものをつないでみるのだが、方法としては、読みながらいくつかの記事(広告も含めすべてのもの)にしるしをつけ、

切りぬいていく。一見かかわりがなさそうに見えるものも、よく考えてみるとつながっているものである。そして、人によってつなげ方は異なるものでもあることなどを導入として説明した。

次いで、切りぬいたものを模造紙に貼りつけ、記事と記事とをクレパスをつかって、線でつないでいく。

完成したのを見ると、同じ新聞をつかしながら、それぞれの宇宙が表わされているようであった。

#### ・スタッフのふりかえりから

学生の完成品をみると、質、量ともにさまざまなつなげ方があった。殆どの学生にとって新鮮な実習であったようである。楽しみながら、興味を持って作業していた。新聞をすみずみまで読むということを普段していないだけに。他の人とわかちあひするのが楽しみという学生が少なくない。

### 3 1995.5.26

#### 今回のねらい

「\*さまざまなことの中から“つながり”を発見する

\*自分の視点(もの見方・考え方)に気づく

\*“つなぐ”主体としての自分を意識する」

導入

実習「私がつなぐ社会」②  
グループ作業

自分のつなぎ方について

My Story記述

#### ・「私がつなぐ社会」(2)

前回個人でつくった自分の作品をグループでわかちあう。6人グループをくじ引きで決めた。それぞれがなぜつないだかという視点を強調しながら説明があった。その後、今度はそのグループで一つの作品を作った。それぞれのものも参考にしながら、グループでよく話し合い、共同制作をした。所要時間は90分。完成後教室内に貼りだして、一言づつ発表する。

#### ・「自分のつなぎ方について」

一連のこれまでの作業をふりかえりながら、「自分のつなぎ方の特徴について考察し、別紙に記入した。

#### ・スタッフのふりかえりから

学生の反応としては、面白かったという感想が多かった。時間いっぱい十分に個人の作品をわかちあっていた。新聞を読むよい機会になったのではないかと。自分には思いもつかなかったつなぎ方があるという発見もあった。全体にのってやっていた。

### 4 1995.6.2

#### 今回のねらい

「自分の視点(もの見方・考え方)に気づく」

#### ・「私が選ぶ現代の10大事件」

スタッフが相談して、最近発生した事件や新聞によく取り上げられる論点を10個あげ、それについて、一番関心があるものを1とし、以下10まで順位

前回のコメント(スタッフ)  
導入  
実習「私が選ぶ現代の10  
大事件」  
(コンセンサスによる  
集団決定)  
個人決定  
集団決定  
ふりかえり

MY Story記述

をつける。まず、個人でつけ、その後グループでコンセンサス法により、グループとして合意できる順位を決定した。結果を全体発表した後、別紙ふりかえり用紙に記入し、グループでわかちあいをした。ふりかえり用紙で強調したことは、自分が大切にしたこと、自分のものの見方の特徴、自分以外のメンバーのものの見方の特徴であった。これは、この日の学習のねらいにそったものである。

・スタッフのふりかえりから

コンセンサスによる決定の過程は、どのグループもやるべきことはしていたようだ。作業に対しては、ポジティブな反応が多かった。コンテンツレベルでの関心は大変高い。その分プロセスについてはやや不十分だった。

## 5 1995.6.16

今回のねらい  
「\*自分の価値観を知る  
\*自分と他者の価値観  
の違いに気づく  
\* “価値観” の意味を  
さぐる」  
導入  
実習「あれか、これか」  
実習「私の価値観」  
記入  
集計  
わかちあい  
小講義「価値観をめぐって」  
MY Story記述

・前回のものの見方、考え方のベースにあるものとして、価値観の問題を掘り下げた。

・実習「あれか、これか」

相対する二つの言葉を全体に提示し、あるものについては、大切さの基準で、また、あるものについては、好き嫌いの基準で選択し、大きく二手に分かれた。そして、なぜそのような選択をしたかについて、随時何人かにインタビューし、それぞれの違いを確かめた。アイスブレイキングの要素をいれながら、価値観の実習の導入とした。

・実習「私の価値観」

36の質問に答え、集計することで、家族、冒険、知識、パワー、お金・資産、友人関係、自立・自由、安全・安定、援助関係の9つの事柄に関して、自分が何に一番価値をおいているかがわかるものである。しかし、実施してみて、項目が標準化されていないので、個人内の比較の意味がなかったようであった。6人ぐらいのグループでわかちあいをしたが、お互いの違いを認識することが出来たようであった。

・小講義「価値観をめぐって」

2人のスタッフが、それぞれの立場から、具体的な事柄にもふれながら「価値、価値観とは何か」について講義した。学生はよく聞いていた。

## 6 1995.6.30

### 今回のねらい

「\*他者の動きに対する自分のとらえ方に気づく  
\*日本的な価値観や行動様式を考える」

導入

映画「12人の優しい日本人」  
ふりかえり

MY Story記述

### ・映画「12人の優しい日本人」

これまで自分や仲間の価値観をみてきたが、さらに一般化する形で、日本人の価値観や行動様式を考えてみる。そのために映画をみることにした。映画を選択したのは、これまで割合に集中して討議することが多かったので、場を転換してみようという意図もあった。映画を見た後、ふりかえり用紙に記入し、数人で、わかちあいをした。

### ・スタッフのふりかえりから

この映画にたいしては、関心をもって集中して見ていたようである。細かいところからプロセスを捉えることが出来ていたようで、その点からも面白かったようである。ふりかえりと、そのわかちあいの時間が短かったようである。

## 7 1995.7.14

### 今回のねらい

「人間にあらためて目をむけ、人間の目指すもの、価値観、原理などを洗いなおしてみる」

導入

実習「人間が大切にしていると思うことベスト10」

個人記入  
グループ討議  
発表  
コメント

レポート課題の提示

MY Story記述

### ・実習「人間が大切にしていると思うことベスト10」

前期最後の授業ということで、課題を人間関係科にもどして、人間関係科は何に価値を置いているかを考えることとした。

まず、別紙に個人で考えられることを10書き出し、それに重要な程度に応じて、◎、○、無印の記号をつけた。次いで、6人程度のグループをつくり（くじびきで）、各人が自分が選んだものを理由もつけて発表。その上、グループで十分討議して、特に重要と思うものを3つ決めた。それを画用紙に記入し、3つに切って提出を求めた。そして、提出されたものを、4人のスタッフが等分に持ち、よく似たものを近くにまとめる形で、黒板に貼りだしていった。学生はその様子を見学。島の形でまとめられたものを基にして、スタッフがコメントする。学生が考えている人間関係科の価値がこのような形で整理された訳である。

### ・スタッフのふりかえりから

グループでの討議ではよく話せたという反応が多かった。これまで漠然としていたことが、具体的に言葉となり、判然としてきたようである。個人で書いたものにはずいぶんバラエティがあったのだが、グループで討議するとバラエティがなくなってしまった。

### ・前期レポートの課題

「原論のねらい」の視点を持ちながら、《1冊の本》を読み、読書レポートを作成する。（本とジャンルは指定せず、各自関心のあるものを自由に選ぶこととした）

## 人間関係原論Ⅱ 後期 1995.9～1996.1

### ◆人間関係原論Ⅱ後期に向けてのスタッフの話し合いから

“関わる” “出会う” “ともにある” について深めていく。今までやってきたことを、もう一度見なおしてみる。社会に出ていくための橋渡しのような内容のプログラムも必要。人関用語を自分の言葉で語れるようになってほしい。原論の全体のねらいにこたえられるように。卒業後自分らしい考え方を持って生きていくことが出来るように。また、人間関係とは何か？ときかれた時に自分の言葉で答えることが出来るようになってほしい。

8 1995.9.29

今回のねらい

「人間関係科での活動のしめくりに向けて後期の原論を考える」

導入

「夏休みの体験・Yes・No  
チョイス」

“1冊の本”のわかちあい

後期の原論の持ち方をめぐって

MY Story記述

#### ・「夏休みの体験・Yes・No・チョイス」

夏休みに体験したことについて、スタッフの問いかけにこたえることで、お互いにわかちあいしながら、8人ぐらいのグループをつくっていった。後期のはじめであり、アイス・ブレーキングをかねて行なったものである。

#### ・“1冊の本”のわかちあい

夏休みの課題として出していた“1冊の本”について、タイトル、著者、出版社を模造紙に書き出し、それぞれがその内容や感想を語った。話し合いの後、その模造紙を教室内に貼り出し、全体で共有化した。

#### ・後期の原論の持ち方をめぐって

ねらい、日程の確認。スタッフが話し合ったことの紹介。次いで、「社会に出ていく“時”をひかえて——」というタイトルの用紙を配布、記入し提出してもらおう。その中身は、①残りの学生生活の中で実現したいこと、②そのためにこの原論でどんなことをやってみたいか、であり、今後の授業計画に反映させようとしたものである。これを書いた後、近くの人たちとわかちあい、さらに一人一人が付け加えた。

学生がやりたいこととして出てきたことは、

「自分を見つめたい。心にしみるような体験がしたい。人関とは何かを自分の言葉で言えるように、ここでの体験の整理をしたい。人関での自分史を書きたい。すべての人と話したい。全員で何かをしたい。全員でものをつくりたい。一つのテーマで深く話し合いたい。実習をあらためてやってみたい。お互いにフィードバックしあいたい。人関での体験を社会で生かすためにを考えたい。スタッフの話を知りたい」など。

・スタッフのふりかえりから

「本のわかちあい」の時は比較的良好に話していた。他の人が読んだ本を読んでみたいといった反応もあった。ねらいの提示も真剣に聞いていた。今後実現したいことについては、段階をふんでいったので書きやすかったようである。

9 1995.10.13

今回のねらい

「これまでの体験や人関用語をもう一度思い出し、自分のものにする」

導入

体験の整理 Part 1

“プロセス”

映画『12人の怒れる男』

プロセスのふりかえり

自分にとっての“プロセス”の意味

MY Story 記述

・体験の整理 Part 1 “プロセス”

学生のニーズをくみあげてプログラムの展開をすることとした。以後何回かを、人関での体験の整理にあてることとし、人関用語を自分の言葉で語れるようになることを目標としたプログラムをたてることとした。

その1回目として、“プロセス”を取り上げた。

・“プロセス”を考える材料として、映画『12人の怒れる男』をみた。ふりかえりの項目としては、「プロセスという観点から印象に残った場面を取り上げてみる」と、そこで起っていた事柄」を具体的に書いてもらった。

・自分にとっての“プロセス”の意味

ふりかえりのわかちあいをグループでした後、「意味づけ用紙」を配り、“プロセス”とは何かを人関以外の人ができるように言語化してみること、“自分にとって”とはどんな意味を持っているかを書くことにした。以後何回か、いわゆる人関用語について繰り返す予定である。

・スタッフのふりかえりから

映画に関しては、「12人の優しい日本人」の方が面白かったようである。意味づけ用紙は人関での自分を考え直すためにも効果的であった。

10 1995.10.27

今回のねらい

「前回と同じ」(2)

小講義「プロセスとは」

体験の整理 Part 2

“ふりかえり”“わかちあい”

実習「白樺山荘ほどだ」

ふりかえり わかちあい

自分にとっての“ふりかえり”“わかちあい”の意味

MY Story 記述

・体験の整理 Part 2 “ふりかえり” “わかちあい”

体験学習の核である「ふりかえり」と「わかちあい」に焦点をあてた。そのために、問題解決の実習を提供。学生は興味深く取り組んでいた。

・自分にとっての“ふりかえり” “わかちあい” の意味

前回同様、実習をし、「ふりかえり」と「わかちあい」を少し意識してやった後、意味づけ用紙に記入した。

・スタッフのふりかえりから

学生の反応をみると、「ふりかえり」「わかちあい」を初めてじっくりやったような感じである。個人へのフィードバックの欄が、ふりかえり用紙にあり、

それをわかちあったので、活発であたらしい発見もあったようである。プログラムに非常に真面目に取り組んでいる。

## 11 1995.11.10

### 今回のねらい

「これまでの体験や人関用語をもう一度思い出し、自分のものにする」(3)

小講義「体験学習における“ふりかえり”“わかちあい”の意味」

体験の整理 Part3  
“違い”“関わる”“コンセンサス”  
価値観の実習「若い女性と水夫」  
個人決定  
集団決定  
結果発表  
ふりかえり、わかちあい

意味づけ用紙記入

MY Story記述

### ・体験の整理 Part3 “違い” “関わる” コンセンサス

体験の整理の3回目として、コンセンサスの実習をし、その過程で「違い」「関わり」について考察することとした。

教材としてつかった『若い女性と水夫』は、プロセス論Dで経験した人が多数いたが、そのことは特に影響はなかったようである。逆に時間内に意志決定出来なかったグループが多かったことは、2度目ということと題材に対する関心の強さを示しているのではないと思われる。また、この教材は今回は「価値観」をテーマにしながら同時に「コンセンサス」も考えようとして、取り上げたものである。

### ・意味づけ用紙記入

意味づけ用紙では、「違い」「関わる」ということとコンセンサスとの関係を問いかけ、さらに、「違い」ということの意味づけをしてもらった。

### ・スタッフのふりかえりから

学生は全体として熱心にやっていた。教材が2回目だからつまらないということとはなかった。ふりかえり、意味づけ用紙とも熱心に書いていた。言語化が十分出来ていたのではないか。グループでのわかちあひもかなり自由にされていたようである。

## 12 1995.11.24

### 今回のねらい

「これまでの体験や人関用語をもう一度思い出し、自分のものにする」(4)

導入  
小講義「“違い”“関わる” “コンセンサス”」

体験の整理 Part4  
“体験から学ぶこと”  
個人記入  
グループでわかちあい  
アピール作成  
発表

MY Story記述

### ・体験の整理 Part4 “体験から学ぶこと”

体験の整理の4回目として、「体験学習」を取り上げた。今回は、最初に「意味づけ」用紙を渡し、体験学習を人関以外の人にわかるように、言語化してもらい、それをグループで共有化して、「人間関係科」のPRにもつかえるようなアピールを、文字、絵などで模造紙に表現した。5～6人のグループでしたが、それぞれの体験をもとにしたユニークなものが沢山あった。全体で投票して順位を決めた。結果発表は次回。

### ・スタッフのふりかえりから

グループ作業へのとりかかりは遅かったが、やりはじめると全体的に集中度は高かった。発表の仕方はそれぞれ工夫していて面白かった。スタッフとしては発表を聞いていて、学生は体験学習のことをよく理解していると思った。日

常生活と体験学習がつながっているという印象を持った。

### 13 1995.12.1

#### 今回のねらい

「人関で過ごしてきた  
“今の自分”の人間関係  
観を確認する」

#### 導入

前回のアピールの投票結  
果の発表  
小講義「人関の授業と  
心理学の授業」  
一分裂する私ー

実習「私の人間関係観  
カラーージュ」  
わかちあい  
言語化とインタビュー

MY Story記述

・小講義では、講義と体験学習の補完性にふれながら、共通点として「拾っていくこと（自分の体験や先人の知識などから）」が強調されていた。

・「私の人間関係観カラーージュ」は、画用紙にクレパスなどをつかって、『人関での体験をベースにして、人とのかかわりにおいて、こうありたいと思う自分を表現してみる』というように指示した。それぞれがクリエイティブに表現していたし、楽しんで作業をしていたようである。

・数人でわかちあいをした後、言語化をしたが、これは、「人との関わりにおいて、『こうありたい自分』と、『今の自分』」を別紙に記述してもらった。記述後、その中で、特に人間関係科で影響を受けたと思われるものにアンダーラインをひいた。これはインタビュー形式で全体でわかちあった。

・スタッフのふりかえりから

人関での生活も残りが少ないということはかなり意識されているよう。カラーージュでつくったものが、人間関係観になっていたか疑問をもっている学生もいた。わかちあいで、他の人の聞いたのはよかったようである。

### 14 1995.12.15

#### 今回のねらい

「卒業後の社会で起きそ  
うな人間関係上のトラブ  
ルを想定し、そこでどの  
ように働きかけるかを考  
えてみる」

#### 導入

実習「あなたならどうする」  
個人で考える  
グループで考える  
発表、報告  
コメント

『誓いのことば』づくり

MY Story記述

・実習「あなたならどうする」

卒業後に遭遇しそうなある会社での新入社員のケースを提供し、まず個人で考え、次いでグループで考えた。ケースのタイトルは「いり中道子さんのケース」で、実際にある会社で起ったことを取り上げたものである。

・『誓いのことば』づくり

これから社会に出てどのように生きていくか、それぞれなりに決意を別紙に書いてみた。

・スタッフのふりかえりから

決定をコンセンサスでと指示したので、解決策は多様性に欠けていた。そこで何が起きているかの分析を深く考えるような指示が必要であった。



## 15 1996.1.12

### 今回のねらい

「人関での私の2年間をEIAHEする」

—私の人関史づくり—

人トレB(卒業時合宿)に向けて  
人関2年間の総まとめとしてやってみたいことなど

『人関自分史づくり』の指示

MY Story記述

・授業時間の前半は、卒業時合宿のオリエンテーションの時間になった。

・『人関自分史づくり』の指示

後半で人関での自分史づくりについて 指示した。これは、別に記入用紙をつくり、それに記述できるようにした。その内容は、縦に授業や他の諸活動などを書く欄を設け、横に月日を書き入れるようにした。時間の経過を追いながら自分にとってのさまざまな出来事を記述出来るようにしたものである。

1回毎書いてきた My Story を読み返しながら作業することとなる。

## 16 1996.1.19

### 今回のねらい

「人関での私の2年間EIAHEする」②

—私の人関史づくり—

人トレBに向けて

人関自分史づくり つぎ

スタッフからひとこと  
レポート課題の提示

MY Story記述

・前回の作業を継続した。

・スタッフからひとこと

2年間にわたった人間関係原論の授業を終了するに際して、4人のスタッフがそれぞれに感じていること、伝えたいことを話した。

・レポートの課題は

1 (1)人関2年間ヒストリーを参考にしながら、あなたが人関の2年間で変化したと思う部分とそのきっかけ、また、変化しなかったと思う部分を記述する。

(2)社会に出ていくにあたり、ここでの体験をどのように生かしていくか、具体的に記述する。

2 原論のねらい(1年のはじめに提示)から1つ以上の項目を取り上げ、それに対する自分の考えを記述する。

・提出されたレポートは、スタッフが分担して読んだ後、学生に返却したので、コピーもなく、ここに報告出来ないことを断っておきたい。